

龍谷大学ボランティア・NPO活動センターは2001年4月に設立され、2021年度で20周年を迎えることとなりました。この間、当センターの活動に対しまして、ご支援とご協力をいただきましたすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。

本学は、御存知のとおり「浄土真宗の精神」を建学の精神とする大学でございます。

本年度は、第5次長期計画のあとを受け、2039年の創立400周年を見据えた「龍谷大学基本構想400」がスタートいたしました。その新たな船出を迎えたところへコロナ禍に見舞われてしまいました。私は、2019年の創立380周年において、基本コンセプトとして行動哲学「自省利他」を掲げました。「自省利他」とは、自分は果たしてこのままでよいのかと自らを省み、他者の安寧に資する行動を心がけることであり、コロナ禍にある今、まさに「自省利他」が持続可能な社会の実現に必要と考えています。今回のコロナは、今後どうあるべきか問い直す機会を与えてくれたのではないかと受けとめています。本学学生と教職員が一丸となって、この困難を乗り越えていかねばなりません。



龍谷大学 学長 入澤 崇

この20年間をみますと、日本各地で幾多の地震や台風、豪雨などの自然災害が発生し、その都度、大きな被害が繰り返されています。そして、そうした自然災害で被災した地では、復旧や復興にあたる支援組織の活動や個人・団体のボランティア活動が報じられ、ボランティアへの関心が高まるとともに、その重要性が増しております。

本学においてもボランティア・NPO活動センターが事務局となり、東日本大震災復興支援活動をはじめとする災害ボランティア活動に多くの本学学生が参加いたしました。学生は現地でのボランティア活動を通して、被災地の状況や抱える課題と現実を目の当たりにし、多くのことに気づき、そして深く考え、模索する機縁を得ることとなりました。この経験こそが人間としての成長を促すものであり「自省利他」につながるものと考えています。

この度の新型コロナは、現在もお先行きが不透明で混迷を深めていますが、今こそ人と人とがつながりあって励まし合い、助け合い、支え合い、共に力を合わせて乗り越えてまいりましょう。

最後となりましたが、ボランティア・NPO活動センターに対し一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

やる気を土台に世直しと学びの広場、これからも！

センター開設20周年、おめでとうございます。「実践で現場をリードする！」龍谷大学（そう私は評価しています）ですが、これはセンターでも同様ですね。

その取り組みは教員などとの連携と他大学に比べて質量ともに充実するボランティアコーディネーターの皆さんの努力に支えられてきましたが、加えて学生スタッフが主体的、創造的に活動してきたことも大きな特色でしょう。

学生スタッフ数を公表している他大学の一部と比較した限りですが、全在校生に占める学生スタッフの比率がかなり多いことも龍谷大学の特徴です。これは、学生スタッフの皆さんがセンターの活動に手応えを感じ、ボランティア活動の楽しさを広く周囲に伝えてきたからでしょう。

そして、その背景にはスタッフに“内発的”な、自身の内側から意欲・やる気が高まる体制をセンターが整えてきたことがあると思います。活動の意欲を高める方法として、一般的に活用されるのは「アメとムチ」を使った“外発的”な動機付けです。望ましい行動をすれば報酬や表彰、大学の場合なら単位を与えるなどの対応を取り、成果をあげられなかったら、そうした報酬は与えない。実際には「ムチ」はまず使いませんが、生徒会活動やボランティア活動の経歴を高校進学時の内申書に反映させるなどの形で、「アメ」を用意する対応はよく取られています。

しかし龍谷大学ボランティア・NPO活動センターは、そうした対応は一切なし。それに代わるのがコーディネーターの皆さんの働きかけです。学生スタッフに企画を任せつつ、不安を感じるスタッフを励まし、より深く活動の意味を考えられるために問いかけ、さらに時には突き放して自律的な活動を促す。実際、コーディネーターの皆さんと話をすると、学生スタッフへの関わりがよく話題に上り、熱い思いで学生スタッフに向き合っていることが伝わってきます。

内側からやる気が高まる鍵は、自律性を高め、熟達できる機会を作り、明確な意味づけを得ることだと言えますが、まさにこのことを実践しているのが、龍谷大学ボランティア・NPO活動センターなのだと思います。

主体的に活動に取り組む姿勢は、自身を取り囲む社会課題を自分事として受け止め、課題解決に向けた行動で“元気”が生まれ、さらに自らの生き方の問いかけにもつながるなど、多くの学びを得るための重要な条件でもあります。

世直しも学びもできる広場として、今後のさらなる活躍を期待しています。



社会福祉法人 大阪ボランティア協会
理事長 早瀬 昇



龍谷大学が会場の日本ボランティアコーディネーター
研究集会 2011 での早瀬氏（中央）

社会の課題に向き合い、活躍の機会づくりを

私は、卒業生として、また地元大津の社会福祉協議会（以下「大津市社協」と略す）の職員として、設立当初から関わりを持たせていただいています。

センター設立前の2000年は、社会保障の大きな節目の年でした。介護保険制度がスタートし、成年後見制度や地域福祉権利擁護事業が創設されました。私は、大津市社協の地域福祉活動計画の打ち合わせで、龍谷大学社会学部の筒井研究室に通っていましたので、先生からセンター設立をうかがいました。関西の大学では、同様のセンターの存在を聞いたことが無かったので、とても新鮮に感じました。センターの入り口は、資料やチラシが整理されていて、とても入りやすかったことを思い出します。



社会福祉法人 大津市社会福祉協議会
事務局次長 山口 浩次

夏の暑い日、瀬田キャンパスを会場に、学生リーダーを対象としたボランティア研修会の講師を担当しました。約50名の参加者は、相手を褒め合うという私のルールでワークショップが熱く進みました。最後のプログラムは、新入生歓迎会の持ち方を話し合い、グループごとにプレゼンテーションをしました。ユニークなアイデアがたくさん飛び出し、参加者どうしが褒め合うという幸せな空間に、龍大生のパフォーマンス力の高さを強く感じ、感動しました。

また、2011年の東日本大震災以降、センターは宮城県に復興支援バスを毎年出しています。私は、活動に参加した学生たちの報告を聞く機会を得ました。学生が、現場のボランティア活動を通して、感じたこと、多くの学びがあったという力強い報告に感動しました。テレビや新聞で聞いて、居ても立っても居られない思いの学生たちが、センターの調整があり活動できたことは本当に良かったと思います。

この経験があり、2013年の大津市の台風災害時には、センターを通して学生が災害ボランティアセンターに参加し、とても助かりました。その後、本会と大学とは災害時の協定を結ぶこととなり、毎年一緒に訓練をしています。

最後に、2020年は、コロナの影響で減収した世帯を対象にした「特例貸付」が、全国の社協窓口で実施されました。大津市社協の貸付相談は11月末で約5000件となり、昨年度比で約100倍、リーマンショック3年間の合計を大きく超えました。コロナ禍の困窮者層の増加は、今後のセンターの活動にも関係するだろうと感じています。

これからも、龍谷大学ボランティア・NPO活動センターが、社会の課題に向き合い、学生たちの各方面での活躍の調整機能を発揮することを期待しています。



2019年度ボランティアリーダー養成講座

これからも共に

龍谷大学ボランティア・NPO活動センターとNPO法人うつくしまブランチのご縁は、2015年度から始まった「福島スタディツアー」です。以来、毎年ツアー初日にお会いするのを楽しみにしております。

今回、設立20周年の冊子に何を書かせていただこうか考え、まず活動報告書を再度開いてみることにしました。丁寧に編まれた報告書から、その年その年の福島ツアーが立ち上がってきました。ちなみにRecord（記録）の語源は、ラテン語で「心に帰る」「心を取り戻す」を意味するそうです。まさに、心の記憶を呼び覚ます活動報告書です。



NPO 法人 うつくしまブランチ
理事 掃部 郁子

復興について「目に見える復興と目に見えない復興を合わせて対策を行っていかねば、本当の意味での復興には届かないと思いました」と、記した学生。2017年度から3年連続で参加した学生の一人は、今年度の報告書に「町の風景に慣れてしまったことが怖いと感じました」と、記していました。ツアーの後も福島関連の本を読むなどしたけれど、問題が複雑に絡み合う鎖のような福島の今を知るほどにわからなくなり、モヤモヤを抱えて1年を過ごし、翌年再びツアーに参加した学生は、避難指示により一度人口がゼロになった南相馬市小高区で次々にビジネスを起こしている男性の話に圧倒され、今ある状況の中で何かできるのか考えて行動していくことが大切だと思ったと書いていました。

私がいつも心を打たれるのは、学生の皆さんの真摯なまなざしと、現地に寄り添い出合いを大事にしながらツアーを育ててこられた教職員の皆さんの努力、そして、学生の微細な心の動きを支え、学生が感じたことを大事にする教職員の皆さんの姿勢です。福島で何を学び、どう行動していけばいいのか。問題が複雑過ぎて私もすぐに返答できません。そうした時に答えを急がず、モヤモヤを抱え続けることも一つの行動だと助言し、支える大人の存在は、大きな心の拠り所になるように思います。

福島で起きたことは、日本のどこにも起こりうることです。自然災害が増えています。新型コロナウイルスの感染拡大も止まりません。コロナ禍の不安と緊張感は、原発事故の際の不安と緊張感と似ています。繰り返したくないことがまた繰り返されています。どうしたらより良い社会にできるのか。これからも皆さんと一緒に粘り強く考え続けていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



2015 年度福島スタディツアーでの掃部氏（左端）と参加学生たち